

『教育論』におけるミルトンとサミュエル・ハートリブの関係と エリート主義的性質

菅野 智城

Milton's Relationship with Hartlib Circle and Elitist Nature in *Of Education*

Tomoshiro KANNO

(Received on Jan. 31, 2023)

Abstract

John Milton's *Of Education* stands out from other educational tractates published in the middle of the seventeenth-century England. This is because his tractate sets the development of national leaders as the purpose of education, rather than educational reform or school improvement for the relief of the poor. This is often cited as the reason why his educational tractate is considered elitist. However, such elitist tendencies do not imply an exclusive educational plan for young people from privileged backgrounds, but rather a comprehensive educational plan aimed at the development of rational and virtuous individuals through education.

キーワード：ミルトン、『教育論』、ハートリブ、エリート主義

1. はじめに

17世紀イングランドの詩人ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) が1644年に発表した『教育論』 (*Of Education*) は、教育思想家サミュエル・ハートリブ (Samuel Hartlib, c1600-62) の熱心な要請を受けて書かれた。ポーランド人の父とイングランド人の母をもち、プロイセンのエルビングに生まれたハートリブは、1628年にイングランドに定住した後、非公式の知的ネットワーク、いわゆるハートリブ・サークルを結成し、農業、科学技術、教育などの分野において活動を展開した人物である。彼はサークル内外で交流ある知識人の著作を紹介、出版していることから、思想家であると同時に後見人として影響力をもつ人物でもあった。また、彼はチェコの教育思想家コメニウス (John Amos Comenius) のイングランド訪問を実現させた人物としても知られている。ハートリブ・サークルを通じて多くの教育パンフレットが出版されたが、その多くは社会政策上の教育改革案としての性格が強いものであった。

一方、この時期のミルトンは、妻メアリーとの別居後に書いた『離婚の教理と規律』 (*Doctrine and Discipline of Divorce*) が幼少時代の恩師トマス・ヤング (Thomas Young) から長老派幹部から猛反発を浴びていたこと、さらには言論と出版の自由を論じた『アレオパジティカ』 (*Areopagitica*) の出版準備に忙しかったこともあり、『教育論』の執筆には積極的ではなかった。またミルトン自身、当時のイングランドで広がりを見せていた教育改革に強い興味をもっていたとは言えず、教育改革論者が好むカリキュラム改革の是非についての議論に参加することを避けている。

ミルトンは自身の教育プランの対象者を「我らの選り抜きの有望な若者たち」 (our choicest and hopeful wits) (*CPW* 2: 377)、「我らの高貴で生まれのよい若者たち (our noble and our gentle youth) (406) と設定し、教育の目的を国家の指導者にふさわしい人材の育成と位置づけている¹⁾。そのため、『教育論』はしばしばエリート主義的であるとの評価が下されている。確かに、『教育論』ではある程度の家柄が前提とされているように思われる。しかし、ここで言う“noble”や“gentle”などの言葉が意味するのは、優秀な指導者となるにふさわしい人格的な資質であり、そしてそれは彼の叙事詩

『パラダイス・ロスト』(Paradise Lost) 第 7 巻冒頭に見られる「少ないながらもふさわしい聴衆を見つけたまえ」(fit audience find, though few) (7: 31) という姿勢に支えられているのである。

また『教育論』では、リベラル・アーツを中心に据えた人文主義的な教育プランが提示されている。特にギリシア・ラテン語の習得には力が入れられており、これらの古典語で書かれた著作をとおして獲得される普遍的な教養が人間形成に資するとしている点から、ミルトンは「人文主義的な教育モデルを完成する」(Chaplin 289) ことを目指していると言える。これは社会的地位獲得の手段として高等教育を求める当時の実利主義的傾向とは立場が異なる。教育改革が叫ばれた 17 世紀中頃のイングランドにおける実利主義と伝統的教養教育の対立からは距離を置き、教育の意義そのものに目を向けるミルトンの姿勢は、効率性や方法論が成熟を迎えつつある現代の教育に対しても示唆的であろう。以上のことを踏まえ、本論ではハートリブ・サークルとの関係性に着目しつつ、『教育論』に見られるエリート主義的な性質について考察する。

2. 『教育論』出版におけるハートリブとの距離感

ハートリブ・サークルをとおして発表された教育改革案は、貧民層の解消と実務的な職業訓練の性格が強いものであった。学校開設、教師の配置、給与の保障を主張する彼らが特に力を入れたのは、情報局 (the Office of Address) の設置である。これは教育、就職、商工業の分野における職業斡旋と、学術的な情報の管理という機能をもつことを意図された機関 (相馬 55-56) である。この情報局構想は、上流階級と下層階級の極端な経済的格差を解消し、実務的教育を与えた後も貧民層の子弟の生活を保障するためのものであった。

ハートリブ・サークルが社会の下層に目を向ける一方、ミルトンはどうであろうか。彼は教育が社会的地位獲得のための手段に成り下がり、野心と利益を求める神学者、訴訟手数料を期待する弁護士が幅をきかせる状況を問題視しているものの (CPW 2: 375)、だからといって実学教育の是非について議論を展開しているわけでもない。教育改革に熱心であるハートリブの要請にもかかわらず『教育論』の分量が 8 ページと少なく、また十分な準備もなく書かれたことは、冒頭で「急を要する」(CPW 2: 363)、「気の向くままの考え」(364) と述べられていることからもうかがえる。また、バーバラ・ルワルスキーが指摘しているように、タイトルページも著者名もない簡潔な書式は、それがハートリブ・サークルと他のいくつかの集団への限定的な流通のために個人的に印刷されたものであることを物語っている (172)。このように、ミルトンが『教育論』執筆に消極的であったのは、時間的な理由に加えて、ハートリブと彼が信奉するコメニウスの教育理念への関心の薄さによるものであろう。これは、冒頭で簡潔な内容に終始するとミルトンが宣言していることから読み取れる。

私は、短くするよう努力する。というのも、ここで私が述べることは、この国が究極的に必要としていることが語られるよりもすぐになされるべきものであるからだ。したがって、古代の名高い作家から私が恩恵にあずかったものについて述べることを私は遠慮したい。そして、私が読めるよりずっと分量の多い最新の『扉』や『大教授学』が計画するものを求めることには、私の気が向かない。(CPW 2: 364-66)

ミルトン自身、教育を取り巻く当時の状況に対しては批判的な立場をとっているものの、コメニウスの『開かれた言語の扉』(Janua linguarum reserata) や『大教授学』(Didactica magna)²⁾ などの著作についての議論をそれとなく避けている。これは全国的な学校システムの整備を目指すハートリブとコメニウスが掲げる万人教育思想がミルトンの主な関心事ではなかったからであろう。『教育論』で展開される話題は、貧民層の解消を目的とする教育の機会均等化ではなく、あくまで国家を正しい方向に導く指導者の育成を目的とする教育プランおよびカリキュラムである。

私が完全で、気高い教育と呼ぶものは、平和時と戦争時の私的、公的職務の全てを公正に、有能に、そして雅量をもって果たすのにふさわしいものである。(CPW 2: 377-79)

この箇所に見られる「雅量をもって」(magnanimously) という言葉は、ミルトンの教育観を考えるうえで重要な意味をもつ。ドナルド・ドリアンが注解を加えているように、「雅量」(magnanimity) とはラテン語の“magnus animus” (大いなる魂) を語源にもつ。これはアリストテレスが『ニコマコス倫理学』で述べた“μεγαλοφροσύνη” (メガロプシュキア)

に由来するものであり (CPW2:379)、ミルトンが理想的な人間像を語るうえでは無視することのできない美德である。たとえば、天使ラファエルによるアダムの教育の場として機能する『パラダイス・ロスト』第7巻では天地創造について解説がなされるが、生物の創造の仕上げとして「自己を知り、それゆえ神と交わるための雅量をもつ」(self-knowing, and from hence / Magnanimous to correspond with heaven) (7:510-11) 人間の創造が宣言される。ここでは「汝自身を知れ」というソクラテスの言葉、アリストテレスの「大いなる魂」、そしてミルトンが神との対話を可能にする美德であるとする「雅量」が互いに反響し合うのである。ギリシア的な意味合いをもつ「雅量」が人間のあり方に即した概念である一方で、ミルトンのいう「雅量」とは「旧約聖書に出る、アブラハム、サムエル、ヨブ、キリスト、パウロなどの神への信徒をとおした諸人物に対して神から与えられた尊厳をさしていることば」(新井 72)に近い。ミルトンは国家を正しく導くことのできる人間像を、『雅量』という古典的な概念にキリスト教的な意味を融合させ(佐野 197)ることによって支えているのである。

ミルトンが教育をとおして国家の指導者育成を目指す一方、コメニウスはすべての人が、すべてのことを、すべての面にわたり教えられるという汎知学(パンソフィア)の立場をとっている。これは、激動の内乱期を生きるミルトンにとっては悠長な理想主義に映ったのかもしれない。このように、教育機会の拡大や学校システムの整備を主張するコメニウスおよび彼を信奉するハートリブと、国家の指導者育成を目的として人間性に根差した独自の教育理念を議論するミルトンの間には、つねに距離感がつきまとうのである。

3. 『教育論』のエリート主義的性質とその評価

国家の指導者育成を目標に掲げる『教育論』がエリート向けの教育プランと位置づけられ、ミルトンを教育改革に否定的な人物、あるいはグラマー・スクール同様の伝統的教育の信奉者とする評価がついて回るのは、その内容が人文主義的であるからに他ならない。『教育論』はギリシア・ラテン語の習得に力点を置く一方で、自然科学の学問分野については古典の著作を列挙した印象が強く、科学的アプローチや方法論が具体的かつ実践的に示されているわけではない。そのような評価に対しクリストファー・ヒルは、『教育論』がエリート主義的でコメニウスの進歩的な計画と合わないと考えすることは国家の指導者となる若者のためのアカデミー構想という目的を誤って理解することになると述べている。ヒルはミルトンが推奨する学校がイングランド全域の都市に設置されることを期待している点を根拠に、その教育プランはルネサンス的でありながらハートリブのそれと政策上一致する新しい教育プログラムであると評価している(147)。ヒルの肯定的な評価に対し、ミルトンの教育プランを「私設のアカデミー」と位置づけるルワルスキーは、ミルトンがコメニウスやハートリブの支持する実践的で経験的な学習、学校設立への公的資金の投入を説いてはいるものの、階級や性別に関係なく包括的に統合された学校システムの構築には消極的である点で、彼らの教育理念とは性質が異なると述べている(174)。またアンナ・ピアは、難解な言い回しを将来有望な若者に無理強いすべきではないとする姿勢には一定の理解を示しつつも、国家の指導者育成を教育理念として掲げるがゆえにそれが男子の教育に重点を置いている点を指摘したうえで、有能な男性市民の教育にこだわるあまり議論の可能性を閉じているミルトンは大陸のプロテスタントの思想家ほどリベラルではない(160)、とやや皮肉を込めて述べている。

当時の教育を取り巻く現状に批判的であったミルトンとハートリブではあるが、両者の教育理念は根本的に異なる。にもかかわらず、ハートリブがミルトンに教育パンフレットの執筆を要請したのは、ミルトンの文学上の名声によるところが大きい。つまり、ハートリブはミルトンのペンの力による教育改革への支持を取りつけることで、あらゆる階級における教育改革の後見人となることを目指したわけである。したがって、ミルトンのエリート主義的とも受け取れるアカデミー構想がハートリブ・サークルから出版された多くの教育パンフレットと性質を異にするものであっても、それは不自然なことではない。

ハートリブを中心とする教育改革論者は、既存の教育制度や教授法に対して不満を抱き、特に貧民層の教育機会の拡大を強調した。しかし先にも述べたように、ミルトンはハートリブ・サークルに馴染みのある話題にはさほど関心を示してはいない。たしかに、ミルトンの『教育論』は、文学的な雄弁術が社会の中心的役割を占める人文主義的視点と、教育の再編に注力する改革者の視点の調和につとめており(Koslow 24)、その点においてはハートリブおよび彼の支持者との意見の一致を見ることは可能である。しかし、ミルトンは人文主義的教育の伝統の枠からは決して逸脱してはならず、ハートリブが目指す職業訓練的な側面をもつ普遍的万人教育を問題として扱ってはいないのである。ミルトンの人文主義的教育プランは、国家の有能な指導者育成を目的にしている以上、それがエリート主義的であるとの評価は

妥当であると言えよう。

4. 『教育論』を支える二つの言葉 — “our noble, and gentle youth” と “fit audience find, though few”

教育の目的を国家の指導者育成に置く『教育論』のエリート主義的な姿勢は、二つの言葉 “our noble, and gentle youth” と “fit audience find, though few” によって支えられている。ここではそれら二つの言葉について考えてみたい。

ミルトンのエリート主義的傾向についてまず問題となるのは、教育の対象が家柄のよい貴族や上流階級出身者に限定されるのかという点である。これについては次の一節が必ずといってよいほど引用されている。

これが、我らの高貴で生まれのよい若者たちが、12 歳から 21 歳までに訓練的なやり方で時間を費やさねばならない学問である。(CPW 2: 406) [下線筆者]

「我らの高貴で生まれのよい若者たち」(our noble, and gentle youth) は、文字どおりには家柄を意味する。社会的階級が影響力をもつイングランドの社会構造において、ここではある程度の家柄が前提とされていることは否定できない。しかし、ミルトンが(彼自身が理想と考える)学校の全国的な配置にも目を向けていることを考えると、彼のアカデミー構想の教育対象は従来のエリート層出身者よりも広く設定されていると考えられる。実際、17 世紀前半には経済発展とともに教育の需要が高まったことで、中流階級出身の大学入学者が増加した。しかし結局のところ、聖職者、弁護士、医者といった社会的地位のある職業への近道として高等教育、すなわち学歴が求められる傾向が強まった。このような実利主義的な風潮に対して、ミルトンは「平和時と戦争時の私的、公的職務の全てを公正に、有能に、そして雅量をもって果たすのにふさわしい」人材の育成に教育の本質を見出している。つまり、“noble” や “gentle” という言葉は、家柄や階級というよりもむしろ、彼の理想とする教育を受けるにふさわしい人格的な資質を意味するものであり、そのために求められる教育の価値が『教育論』では論じられていることを理解する必要がある。

このような、人間性に根差したエリート主義的な姿勢を支えるもうひとつの言葉として、“fit audience find, though few” (下線筆者; 少ないながらもふさわしい聴衆) を挙げることができる。これは『パラダイス・ロスト』第 7 巻の冒頭の詩神ウラニアへの呼びかけのなかで見られる言葉で、そこには詩人が読者を選別するような姿勢が見え隠れする。

闇の中、危険と孤独に囲まれてはいるが、
しかし一人ではない。汝が私の眠りを夜毎訪れている間は、
あるいは朝が東の空を赤く染める時には、
汝、絶えず私の歌を取り仕切りたまえ、
ウラニアよ、そして少ないながらもふさわしい聴衆を見つけたまえ。(Paradise Lost 7: 27-31)

この呼びかけに続き、天使ラファエルはアダムに天地創造の歴史を語り聞かせることになるが、それは神と悪魔の対立が読者の感情を掻き立てる『パラダイス・ロスト』のなかでも、読者にしてみれば長大な歴史の概説授業のような、やや退屈に感じられる部分である。それを踏まえたうえでの “fit audience, though few” という言葉には、耳あたりのよい数字やビッグネームあるいは刺激的な描写ばかりを追い求め、真理や知恵の本質を理解できない読者を拒否する姿勢が示されているのである。このように、理解力の足りない読者の門前払いというスタイルは “our noble, and gentle youth” と反響し合うのである。ミルトンのエリート主義的な教育観は、これら二つの言葉が示唆する、教育を受ける側の資質に支えられている。

5. おわりに

ここまで、ハートリブ・サークルとの関係とともに『教育論』のエリート主義的な性質について見てきた。実際のところ、人文主義的な内容に終始するミルトンが教育という主題にどれほど関心があったのか疑問が残る。たしかに、ギ

ロシア・ラテン語といった古典語の習得に力点を置く姿勢は、当時の教育改革の流行に合致したものであるとは言えないだろう。しかしながら、『教育論』は、教育改革の提言というよりもむしろ自由共和国実現のために人間の内に根差した全人格的な教育書と位置づけることの方が妥当である。伝統的な人文主義的教育の意義を問い直し、国家という広い視点で議論が展開されるという意味では、『教育論』は伝統的なエリート主義を貫きながらも、それはミルトンのオリジナリティーとも言えるキリスト教的な視座を抛りどころにする人間像、さらには彼の晩年の詩作品に見られる英雄像の形成へとつながるものである。

注

- 1) 本章では『教育論』からの引用はすべて *Complete Prose Works of John Milton* による（以下 CPW と略す）。また、本稿中の英語文献からの引用の日本語訳はすべて筆者によるものであるが、*Of Education* の日本語訳には私市 元宏・黒田 健二郎訳『教育論』（未来社、1984年）を参考にした。
- 2) 『大教授学』は当初、コメニウスの母国語であるチェコ語で書かれたが、その後ラテン語版が1639年に完成し、1657年に公刊されている。

引用文献

- Beer, Anna. *Milton: Poet, Pamphleteer and Patriot*. London: Bloomsbury, 2008.
- Chaplin, Gregory. "Education." *Milton in Context*. Ed. Stephen B. Dobranski. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Hill, Christopher. *Milton and the English Revolution*. New York: Viking, 1978.
- Koslow, Julian. "'Not a Bow for Every Man to Shoot': Milton's *Of Education*, between Hartlib and Humanism." *Milton Studies* 47 (2008): 24-53.
- Lewalski, Barbara K. *The Life of John Milton: A Critical Biography*. Oxford: Blackwell, 2000.
- Milton, John. *Complete Prose Works of John Milton*. Gen. ed. Don M. Wolfe. Vol. 2. New Haven: Yale UP, 1959.
- . *John Milton: Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. 2nd ed. London: Longman, 1998.
- 新井 明 『ミルトン』 清水書院、1997年。
- 佐野 弘子 「イギリス・ルネサンス詩人における自己形成型の系譜」 佐藤 紀子他 『イギリス・ルネサンス期の言語と文化—時代精神と自己形成—』 英宝社、2010年。
- 相馬 伸一 『教育思想とデカルト哲学—ハートリブ・サークル 知の連関』 ミネルヴァ書房、2001年。